

# 灯火法語

人は出会いによって育てられ  
別れによって深められる

(ある掲示板の言葉)

●人との「出会いの数」を統計的に表した、ある面白い記事を見つけました。

その内容を記しますと、人生の中で何らかの接点をもつ、人との出会いの数は「三万人」ほどいるそうです。この中から、同じ学校や職場で顔見知り程度に出会う人は「三千人」、またその中から会話をしたり、互いに顔と名前を覚えるような友人関係になる方が「三百人」ほどおり、またその中で、より深い関係となり、互いに支え合ったり、悩みを打ち明けたりできる「親友」と呼べるような方との出会いは、たった「三人」ほどだそうです。

もちろんこれは統計的な話なので、人によってその出会いの数は前後します。

考えてみますと、途方もない数の人々が、世の中で生活をしていますが、その中で出会い、ときに家族であったり、友人と呼べるような間柄で心通わせている関係はごく限られた方しかいない、ということになるのでしょうか。

●「人は出会いによって育てられる」

私の今までの人生を振り返ってみても、いつの時代も私を支え、育てていただいた方々が思い浮かびます。子どもの時を支えてくれた親をはじめ、祖父母の存在や、小学校のときに夢中で一緒に遊んだ懐かしい友人の存在。学生時代には、仏教の素晴らしいさを教えていただいた恩師の存在もありました。

皆さまの人生の過去を振り返ってみても、素晴らしい「出会い」があり、育てていただき、人生の道筋を作って下さった方々がいらっしたことでしょう。「素晴らしい出会い」を重ねていくというのが人生の一つの側面です。

●しかしながら、出会いの先には必ず「別れ」が待っています。さまざまな別れの形がありますが、とくに家族や親友といった深い関係を築いてこられた方との別れは、いずれその時がやってくると知ってはいても、悲しみや寂しさで涙がこぼれるものです。

別れの涙の裏には、そのお方との、かけがえない素晴らしい出会いがあった、とも味わえるのではないのでしょうか。「別れによって深められる」

●別れの悲しい経験があってもこそ深められてゆく、命の世界もあるものです。

大切な方との別離に苦悩しつつ生きる「私」の命の有り様を事細かにご覧になった阿弥陀如来は、その命、決して虚しくは終わらせはしないと大きな願いを起こされました。「我が国（浄土）に生まれていくと思い、お念仏申して生きてゆきなさい。必ずあなたをお浄土に迎えとる。ともに一つのところで、また懐かしい方々と出会っていく世界があるぞ」と、今も念仏となって確かに、そのはたらきが届いています。

南無阿弥陀仏

## お供え物



納骨堂の掃除をさせていただくなかで、それぞれの納骨壇には、様々なお供え物やお飾りがありました。

今回は、納骨堂でのお供え物のお話。

たいていの場合、お供え物には、お茶やお菓子、たばこ、ビールに焼酎など、先だった方が好きだったのかな？ と思えるようなものが供えられていることが多いようです。

亡き方を偲ぶ、お供え物やお飾りの形はいろいろとあるもので、「家族写真」が飾られていたり、お孫さんから故人に向けた「手紙」、生前に作り残された「手芸の人形」など。それぞれの納骨壇には、故人を偲ぶ個性豊かなお供えやお飾りがあります。

そんななか、私が良いなと思ったひとつの形は、家族や親戚、友人がお参りに来たときに、それぞれの思いを書き残す「一冊のノート」でした。いつ、誰がお参りに来たのか記したり、交換日記のように、先だった方への思いや近況の報告をしているそうです。家族や兄弟が、本人の知らないところでお参りに訪れていたという事実が形となり、思いとなつて残っていくのがいいですね。

お供え物のなかで、残念な形も時折見受けられます。それはお供えもがそのまま、ゴミ箱に棄てられていることを目にするときです。もったいないことです。できる限り、お供えしたものは持ち帰り、最後までいただく、ということを心がけて欲しいと思います。

亡き方が好きだったものを供えるというのも一つの形かもしれませんが、今を生きる家族が好きなものをお供えても構いません。

ある家庭は、お孫さんが好きなお菓子を納骨壇にいつも供えてあるそうです。お参りにくると、そのお菓子を一つ持って帰っていいようで、子どもさんが嬉しそうにお参りにくる風景が目に見えます。子ども達に、亡き方を偲ぶお墓参りの習慣を大切にしてほしいと願う、親の思いがこもった素晴らしいお供え物だなと思いました。

皆さんは、納骨堂（お墓）や仏壇にどのようなお供え物をされていますか？ 面白いお供え物やお飾りをしている習慣があれば、また教えてくださいね。